

論壇

異質のものへの抵抗感

先日、ある新聞に掲載されていたスペインの観光反対運動についての記事を見かけた。スペインといえば年間に6500万人以上の観光客が入国してくる観光大国である。人口1人当たりの外国人観光客数で見ると、日本の10倍近い数となるようだ。

新聞記事に紹介されていたのは、バルセロナの話だ。バルセロナといえばスペイン有数の観光都市で、ガウディの建築自当の観光客が押し寄せると、市内最大の産業が観光であると言っても過言ではない。私も昨年の秋にバルセロナに行く機会があった

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

が、外国人の観光客で溢れているという感じだ。その意味では夏のパリにも似たようなところがある。

これだけの外国人観光客が押し寄せると、当然、地元の住民との間に軋轢あきまきが生まれる。観光客は夜遅くまで騒いでうるさい。ゴミを道路に放り投げる。民泊

スペインの観光反対運動

への需要が増えたので、アパートに回る部屋が減って、家賃が上がっている。こうした不満が地元の住民から出て、それが観光反対運動につながったのだという。

外から異質のものが入ってくることで、自分たちの生活が乱される。そうしたものが入ってくるの

は反対だ。簡単に言えば、こうした主張であるが、これは他のところでもよく聞く話である。中国やメキシコから大量の安い商品が入ってくるので自分たちの職

品が奪われたと騒ぐ米国のブルーワーカー達。ポーランドなどから大量の労働者が入ってくるので治安が悪化し、自分たちの仕事

奪われたということで、EUからの離脱に票を投じた英国の労働者達。観光とは違った問題だが、問題の本質は同じだ。異質のものが入ってくると、自分たちの生活が壊される、という地元民の不満である。

ただ、バルセロナのケースを見ても明らかのように、バルセロナ

に観光客が来なくなれば、バルセロナの経済は大変なことになる。観光客が来るので地元の人にも仕事があるわけだし、街としても税収が確保できるのだ。観光がなくなればバルセロナの街は今の形での存続は難しい。

日本に来る観光客の数は、まだ少ない。バルセロナで起きたような観光反対運動がすぐに起きるといってもいいだろう。ただ、スペインで起きたことは、近い将来の日本で起きてもおかしくない。異質なものが大量に入ってくれば、それに対する反応も大きくなる。

日本は地域対応議論を

では、どうしたらよいのだろうか。観光客の数を抑えるということとは、今の日本の状況からは考え

難い。海外から多くの人があることとは、マイナスイ面以上にプラス面が大きいように思える。こうしたプラス面を考えれば、観光は抑制するのではなく、さらに振興すべきものである。

そこで重要なことは、外から多くの人が入ってくることで軋轢を生まないよう、受け入れ側が準備することである。観光という産業、外国人の受け入れ方、地域の産業と観光の関わりなどについて、日頃から地域で考える機会を増やすことが必要となる。観光はただそれを振興すればよいものでもない。観光が地域の住民により多くのメリットをもたらすためには、どのような取り組みが必要なのか、地域での議論を深める必要がある。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。